

異色な文人 短歌や漫画を好み ユーモア作家として活躍する

学生時代から
文学や絵画に親しむ

「子をもつ親の心もわからない馬鹿息子ほど親は可愛ゆき」公平77歳の正月に詠んだ歌である。

著名な文化人であった公平が、有能で立派な要職に就いている息子のごとで、何が不足に思われたのか、家族が知らないうちに書き残していたユーモア作家の一面である。

伊藤公平は、明治34年(一九〇一)7月28日、印旛郡八生村押畑17番地(現成田市押畑)に父総平(歌人・成田女学校書記)・母よねの一男一女の長男として生まれた。

大正8年(一九一九)年3月、地元成田中学校(現成田高校)を卒業して国学院大学に進んだ。

少年時代から体が弱かった公平は、たくましい農村の子供たちの中にあっ



伊藤公平(いとう こうへい)

成田市押畑に生まれる。国学院大学を卒業後、教員生活を送る。長く千葉市に在住し、千葉県で異色な文人として活躍する。戦後押畑に帰り、文化活動に専念する。豊住小・豊住中・西中・成田国際高校の校歌の作詞者で、晩年、成田市民憲章制定委員会会長を務めた。

て「ヨロツとした晩年のスタイルそのままの風貌のようであった。そうした虚弱な体質はおのずと文学や絵画に親しむ傾向の青年になっていた。特に国学院大学在学中に国学者で歌人の佐佐木信綱や折口信天、武田祐吉などの著名な教授の授業に接して、文学の素養を深め、さらに自分の才能の好む所は漫画であるとして川端画学校(明治42

漫画に熱中し、学校を
転動させられる

大学卒業後、安房郡南三原の安房農学校に就職した。

やがて千葉県立高等女学校に転動し、ここでは6力年勤務をした。しかし、このころから公平は、当時政治漫画で名をなしていた岡本一平(画家岡本太郎の父)や、池部鈞(俳優池部良の父)に師事し、昭和3年、公平はこうした人々に推されて日本漫画会会員となっ



生家の裏山に建つ公平の歌碑

た。この年、長男の雅敏が誕生し、2年おいて長女勲子が生まれた。

昭和6年、公平は突然茂原の長生中学校へ転動を命ぜられた。その理由は「教師でありながら漫画に熱中している」ということは不謹慎極まる」というのが公表されない理由であった。

しかし、千葉から1時間を要する茂原通いも、通勤の間には文筆、画筆を楽しむ機会となった。

昭和7年、県立女子師範学校教諭に栄転し、ここで10年間勤務をする。2年後、今度は県外教育視察(今日の教育研修)を命ぜられ信越方面へ出張した。昭和10年、母よねが55歳の、またこれからという年齢で突然逝去した。

昭和16年、公平は39歳で教員生活に終わりを告げた。

やわらかき胸のまろみを見つづいて先生われはさびしかりけり (大正14年) かへりみて十八年は長かりき臉に浮かぶ教え子の顔 (昭和16年)

同年4月千葉市の兵備課長に就任した。折しも同年12月8日、日本は太平洋戦争に突入した。公平の任務は時の軍司令部からの電話を受けてそれを召集令状として本人に伝達する職務であった。昭和18年、戦争のさなかで父総平が亡くなり、20年7月千葉市がB29の空襲で、市街地の大半が焦土と化した。これをきっかけに一家は押畑の家に戻った。

昭和23年、戦後の行政改革、民主化の時代を迎え、児童福祉法が施行され制度が進む中で、公平は千葉県中央児童相談所長に任命された。ここでは戦後の混乱期の社会で浮浪児や非行少年

の続出に対し、こうした少年少女の救済につとめる責任者として、6年間に過している。育った環境は異なっても人の子に対する思いは平等にと公平はどんな子も分け隔てなく子供たちの心に通うあたがい指導に励んだ。

著名な文化人として認められる

昭和29年、公平は長い間携わってきた教員、公務員という堅苦しい「公」のつく仕事を離れて奈良屋百貨店社長で著名な俳人でもあった杉本郁太郎に招聘され、同社嘱託となった。これは



昭和39年県庁で県内ニュース出演の一コマ『日々是好日』より

俳人としての杉本が歌人としての公平と相通する長い交友関係があり、同百貨店社報『寧ろ』の編集を引き受けていた実績によるものであった。同じころ、千葉県農協中央会からも囑託の依頼があり、同会の会報発行も手伝うことになった。こつしたきっかけで公平は、県内官公署を中心として一部民間企業も含めた広報紙などの編集者を集め、千葉県編集者協議会を組織し同会会長を20年間にわたり務めることにもなった。

その下地は古く、大正12年

頃、県庁内の社会教育の機関雑誌「千葉青年処女」の短歌の選者に始まり、昭和7年には東京日日新聞（現在の毎日新聞）千葉版の「房総文苑」欄の短歌の選者とならせて千葉日報の短歌部門の選者となり、幅広い分野で房総歌人の指導、育成に努めてきたことになった。このほか、成田市をはじめ各地に短歌教室を設けての指導にあたり、のちの千葉県歌人クラブも創設以来長期にわたって代表を務めた。公平は一躍県内の著名な文化人として遇されるようになった。その活動の中心には常に短歌があった。

公平漫画の原点は41年間に及ぶ絵日記

一方、公平は師の岡本一平が朝日新聞に連載している社会時評を読んで、漫画の面白さだけでなくそこに添えられた漫画の面白さに惹きつけられていた。自分もいつかはそつした作品を作ってみたいという強い思いがあったことから独自の「コマ漫画」を発表し、ここに「ユーモア作家伊藤公平」の名が高まっていた。

この公平の実績の陰には、「コマ漫画」に短文を書き添えた昭和16年から昭和57年頃に及ぶ41年間の『日々是好日』と名付けられた膨大な絵日記があ

った。そこには人の目に見えない所で公平の精進がありありと残されていて驚嘆の目を見張るものがあった。

この間に一般誌への寄稿、投稿された文章は無数にあるが、出版した著書も11冊を数える。随筆集『女生徒』（昭和17年刊）、『娘友達』（出版禁止）、『卒業前後』（昭和17年刊）、『お役人』（昭和27年刊）、『月給短袋』を農業新聞により、『謔長夫人』、『月給短袋』を農業新聞から出版。歌と随筆『無名歌人』（昭和44年刊）『ヨーロッパ短歌の旅』（アラスカ・北米紀行）（昭和48年刊）『ユーモア読物』部落半世紀（昭和51年千葉日報社刊）。

こつして公平は、昭和46年秋、千葉県から文化功労賞を授与されている。このほか、「明るい選挙推進」の功により、藍綬褒章を受けている。

晩年、公平は、成田市民憲章の制定委員会会長となり、その任を果たし、市民のための交通安全音頭を作詞して地元奉仕に心がけ、文筆活動は毎日歌壇の選者としての仕事としていたが、昭和59年3月9日、83歳で文人一代の生涯を終えた。逝去後、敬愛する親父のために、息子雅敏によってひそやかに自宅の庭に歌碑が建てられた。

さわやかに日はのほりたり御社の庭つつくしき老松の影

公平

（文中敬称略）